TNVN network news
東京日本語ボランティア・ネットワーク
URL: http://www.tnvn.jp/　E-mail: webadmin@tnvn.jp
2018年
9月14日発行
No.103

ボランティア日本語教室での日本語支援とは？

●N3ってなんですか？

東京日本語ボランティア・ネットワーク（TNVN）は、今年2月に冊子『ボランティア日本語教室ガイド2018東京』を発行致しました。冊子に掲載するために各教室に調査票をお送りし、ご回答をいただいたところ、入会条件に「ひらがなカタカナの読み書きができること」や「中級以上」「N3以上」と限定する教室が目について驚きました。

言葉のために毎日の生活に不自由している人たちを隣人として支援するのが日本語ボランティア、困っている人を誰でも受け入れるのがボランティア日本語教室だったはずです。

もちろん、今でもかなりの教室は、「だれでも受け入れる」「来る者は拒まず」とうたっていますが…。

●確かに、日本へ来たばかりで「こんにちは」も知らない人の日本語支援をするのは難しいことです。

せめて週に2回、3か月程度、日本語初心者が勉強できる場所、日本語教師を職業とする人が教える教室が各地域の行政の責任と費用で設置されたらと願っています。そこで、基礎的な日本語を学んだ人たちが、言葉や表現を広げるために、また言葉だけでなく、地域の情報や日本の習慣、日本人の考え方などを知るために、ボランティア日本語教室に参加するというのが望ましい形だと思います。

●日本語ボランティアのための教材がない？

ボランティア日本語教室で、日本語支援をするための手がかり、適切な教材がないというのも悩みの種です。支援者（ボランティア）たちは、ジェスチャーや絵や写真など、できることはなんでも使って、相手と意思疎通をはかろうとします。チラシや新聞広告などを会話の種にならないかとため込みます。

相手（日本語学習者）も、特に大人の場合は、日本語がわかるようになりたいと、支援者が伝えようとすることを必死に推理してくれます。まず、学習者が希望するのは、自分の要求を日本語で言えるようになること、すなわち、日本語での会話です。

文法積み上げ型の教科書を使っている支援者は、会話がはずんで教科書を先に進めなかった時、今日はおしゃべりばかりになって学習者に申しわけなかったと言います。しかし、日本語で1時間近くもおしゃべりできたら、学習者はとても満足しているはずです。ごく普通の日本人とごく普通の会話ができる場所、それがボランティア日本語教室です。

●日本経済新聞（5/30、7/25）一面に、N3とかN4とか出ていてびっくり！

日本語能力試験（JLPT）は、大学受験や就職などに必要な日本語能力をみるテストで、日本語力が一番下のN5から、上級のN1まで5段階あります。

只、評価されるのは読むことと、聞くことだけで、話すテストはありません。

政府は外国人労働者受け入れを拡大するため、ある程度の日常会話ができるN4の日本語力を持つ人を対象に最長5年の滞在を認めるそうです。300時間程度の学習が必要というN4までの日本語教育はどこが責任を持って、どこでするのでしょう。

インドネシアなどから来たEPA介護福祉士候補者は、日本語を学習する機会と時間に恵まれ、日常生活には困らない程度の日本語力を得て、介護福祉士になるための専門的な勉強や介護の実習をします。それには多額のお金が使われているそうです

しかし、政府は、単純労働者にはそんなにお金をかけられないと思います。

各地にボランティア日本語教室があるからと、頼ってくるのではないかと懸念しています。おもてなしの心で活動する日本語ボランティアですから、NOとは言えませんが、ボランティア日本語教室の現状にも目を向けていただきたいのです。

すでに、各地のボランティア日本語教室には技能実習生が入ってきて、いろいろ問題もあるようです。（関連記事8ページ・文責林川）

図表で見る　ボランティア日本語教室の活動

「調査報告書・日本語ボランティア活動実態調査」

抜粋 その3

これまでに101号で「ボランティア日本語教室の実情」、102号で「学習者からの回答から」を掲載しました。今号はボランティア個人に回答してもらった活動状況を紹介します。

3　ボランティアの回答から

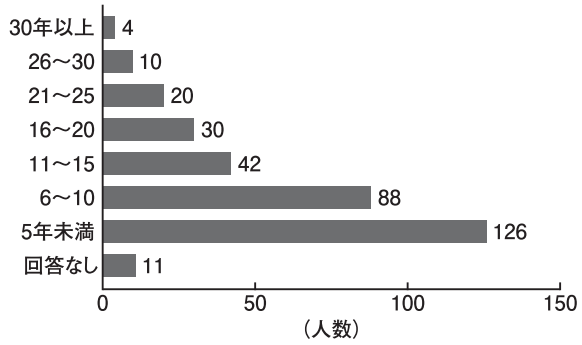
(1) 日本語ボランティア活動への関わり

①日本語ボランティア活動の年数

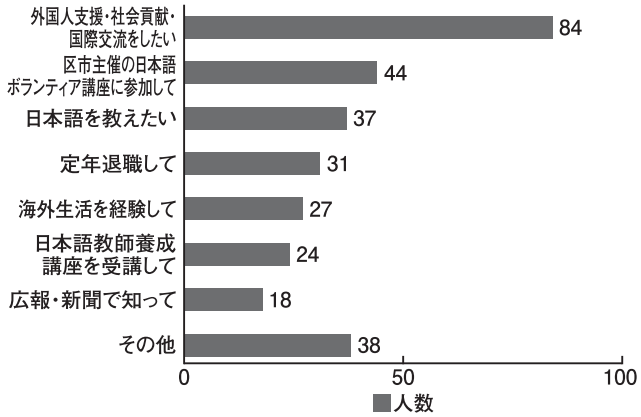
活動年数5年未満の人が4割近くいます。

一方1割の人が21年以上ボランティア活動を続けています。

4人に1人は6〜10年間活動をしています。



②日本語ボランティアを始めたキッカケ



(2) 現在日本語学習支援をしている学習者について

①何人の学習者を担当していますか

担当人数が1人は20%に過ぎず、2〜3人を支援する割合が40%近い

一方で教室形式や年間で担当した学習者数7人以上が25% で多数の学習者と関わっています。

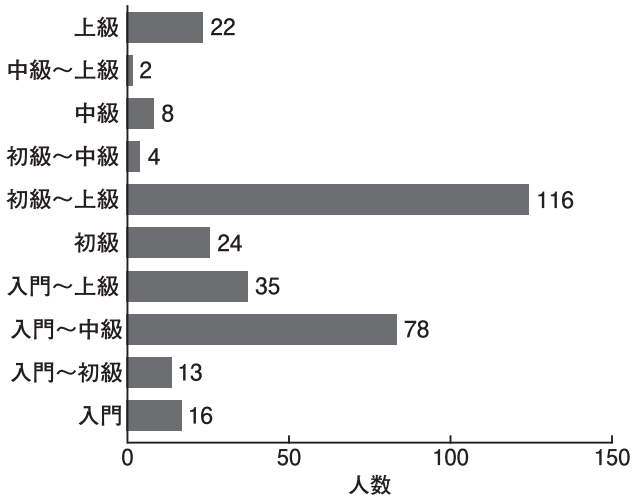
担当人数	人数	%
1人	66	21.2
2人	62	20.0
3人	56	18.0
4人	23	7.4
5人	18	5.8
6人	6	1.9
7人以上	79	25.5
計	310	

②どんなレベルを担当していますか。

入門・初級・中級・上級レベルと限定して学習者を担当しているボランティアと複数レベルの学習者に対応しているボランティアがいます。

一つのレベルに限定して学習者を支援しているボランティアが22%、複数レベルの学習者を支援しているボランティアが78%です。

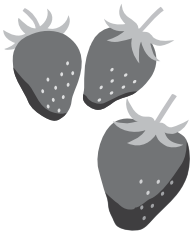
担当する学習者のレベル



紙上教材
果物狩り（フルーツ狩り）

日本には　いろいろな　果物が　ありますが、季節の　果物が　一番　おいしいです。
店では　季節の　果物を　一番　前に　置いています。
新鮮な　果物が　食べたい　ですか。
果物を　作っている　農園や　果樹園では、「果物狩り」を　しています。
「いちご狩り」や「ぶどう狩り」や「なし狩り」などが　あります。
自分で　果物を　取って、そこで　食べる　ことが　できます。
旅行会社などの　ツアーが　あります　から、家族や　友だちと「果物狩り」に　行きませんか。

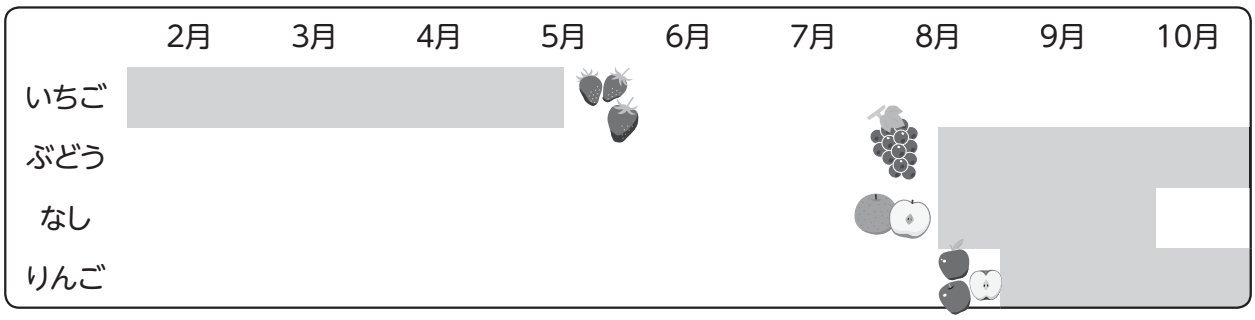
「果物狩り」の　季節は　下を　見て　ください。



おいしい　いちごは、皮の　ブツブツが　よく　わかります。
ヘタが　緑色で、きずが　ありません。

「いちご狩り」は、東京都練馬区、埼玉県、千葉県などで　できます。

おいしい　ぶどうは　粒が　固くて、軸が　太いです。
新しい　ぶどうは、皮に　白い　粉が　ついています。
「ぶどう狩り」は、東京都練馬区、山梨県、栃木県などで　できます。



世界一の親日国 台湾の話
～背景を知って初めて真の交流～

紙上講座

日本語教師　金子広幸

20年前のことですが、台湾台北での仕事があったとき、大学院生2人に同行してもらったことがありました。私はさらにその10年前、台北に住み、日本語教師としての初期の経験を積ませてもらっています。

その2人を連れて、市営バスで仕事場の大学に向かっている時のことです。当時は民主化運動の著しいとき、台湾に住んでいる漢民族の一派「客家（きゃっか）」（英語ではHakka）の人々の集会があったらしく、ある停留所からお年寄りがワンサカと乗り込み、バスの車内は私のわからない客家語でいっぱいになりました。私たちは席を立ちその方々に席を譲りました。

ちょっとここで学問！

台湾には、もともと原住民の人々がいました。日本時代は、山の方に住む人を高砂族と呼び、平地に住んでいる人を平埔族（へいほぞく）と呼んでいました。呉鳳さんの「身を捨て義を取る」の話が戦前の日本の教科書にも載りましたが、最近は民族問題の見地からこの見方が否定されています。一時オランダやスペインに占領された時代もありましたが、鄭成功の時代には盛んに大陸との交流があり、前後して渡ってきた漢民族の福建系の閩南（びんなん）語を話す人と、広東系の客家語を話す人が定着、混血も進みました。第二次世界大戦後、蒋介石さんと一緒に中国大陸から渡ってきた外省人と呼ばれる人たちも来て、さらに混ざり合って、今の台湾の人たちができたのです。

「家庭によって文化がまるで違う」ということを、私は台北に住んでいるとき実感しました。風習や宗教も、何しろ言葉が異なるので、違うのは当たり前です。お正月や中秋節の時の習慣も異なるし、日本でも有名なビーフンという食材は本来台湾の新竹や桃園などの客家の人々の料理だということもその時知りました。もともと中華の中原にいた王族・貴族の末裔といわれている客家の人々。教育を重んじる伝統が私には眩しく感じました。

私が生涯の大切な時間を過ごさせてもらった台北大稻埕（だいとうてい）の張家は有名な茶商で、福建系の閩南語を話す家庭でしたが、大旦那さまは日本教育を台湾で受けていらして、普段の日本語はもちろん、日本の古典、漢文などは日本人の私よりずっとお得意でした。大家さんの奥様のお父上は、浙江省から戦後に渡って来られた外省の方でした。この方も私を可愛がってくださって、唐詩や宋詞の名作を授けてくださいました。私たちは集まって食事の時など、先にじゃんけんをしてその時話す言葉を決めたりしていました。おかげで金子は中国語以外にも、台湾語と呼ばれる閩南語を少し話せるようになったのです。

もちろん「中華民国」ですから、現在の第1言語は北京の言葉を基にした「國語」いわゆる中国語ですが、長い中台の分離で差が生まれ、今では「台湾華語」と呼んだ方がいいのではないかといわれるほど、中国の中国語とは隔たりがあります。でも基本は同じ言語、金子の話す台湾風の「國語」でも、中国の人とは充分に話せます。

このように多くの文化が混在する台湾社会。多様化を、閉塞感漂う日本よりも早く意識することができたのだと思います。日本時代の建築をリノベーションしたり、神社を再建したり、最近では外国人労働者の受け入れ、同性婚の国法化と、多様化を認めようとする動きはさらに広がっています。

読者の皆さんの中には、「台湾の言葉は台湾語だけだ」と思っていた方もいらっしゃるのでは？日本人の台湾に対する知識のなさに、びっくりすることもあります。あるとき「私はタイワンに住んでいたんですよ」と言ったら、「私も行きましたよ。バンコクはいいところですね！」と言われました。この話の面白さがわか

らない方はぜひ地図をお開きください。

さて、本題に戻りましょう。目的地の大学図書館分館にバスが近付いて、私が日本語で「金山南路のバス停は次かな？」と独り言を言ったら、席をお譲りした女性が日本語で「どちらにいらっしゃるの？」とお尋ねくださいました。そのあとは全く無意識にその方と日本語でやりとりしたのですが、次々に周りの客家の方々が「師範大学の図書館に行くなら一つ前がいいよ。金山南路だとちょっとバックしないとならないからね」などと実にこなれた日本語でおっしゃるのです。

ご存じの方には説明は必要ありませんね。台湾は1895年から1945年まで50年間、日本だったのです。当時の60代の方々は、日本教育を受けているので、日本語を話されました。

と、そのときです。その院生の一人が「え？どうして日本語？？」と言ったのです。すると集会のリーダーらしき男性が即座に「君が生まれる50年も前から僕は日本人だったよ」と。

私は顔から火が出るかと思うほど赤くなってしまいました。さもありなん。日本の学校の歴史の時間で扱うのは、大抵幕末までで、明治以降の歴史を扱いません。あとでその院生に聞くと、台湾には日本領だった時代があることを知りませんでした。

まあ、でも、若い人はそれでもいいか…。

親日国といわれている台湾。日本に災害があると、あっと言う間に義援金が寄せられたりして、とても親切な国台湾。

50年の日本の統治では、統治機能・教育の充実化、森林資源・製塩技術・農業技術の開発、近代製糖の普及など多くのインフラの整備があり、それに貢献した伊沢修二、後藤新平、八田與一などの功労者も多く存在します。

でも、それは内地で行われた皇民化教育の延長を招くこととなり、戦後の評価が分かれるところです。その結果、日本の軍属として招集され、尊い命を犠牲にされた方も多くおいでです。

第二次世界大戦中には、台北、高雄、新竹、基隆などは「日本の大都市として」アメリカや中華民国の飛行機による空襲が行われ、多くの死傷者、被害があったこと、日本の人はどのくらい知っているのだろうかと思います。

中華民国に返還された後も、為政者として中国から来た外省人と、もともといた人の間には軋轢・摩擦があり（そりゃそうですね、先月まで敵同士だったのですから）、やがてそれは白色テロという恐ろしい結果に繋がりました。その後、民主化が行われる90年代まで、台湾は経済は成長したものの政治的には不安定な時代が続きます。戒厳令下でしたので、私も人生で初めて防空演習にも参加しました。私たちは「日僑」という腕章をつけられ特別扱いされるのですが、隣りの人の声さえ聞こえない警戒サイレンに戦時の恐ろしさを思いました。

けれど、日本語世代の人々にたくさんお話を伺う機会がありました。そんな時も「カネコサン、日本語で話すときくらい「タイホク」と言ってちょうだい」とよく言われました。私が台北を中国語で「タイペイ」と言っていたからです。当時は恐らくその院生のように無知だった私を許しながら、温かく育ててくださった皆さんの笑顔を思い出すことができます。

今、私のクラスにはさらに若い台湾の学生さんたちが来ています。海峡はキナ臭くても、クラスでは中国、台湾の学生は並んで座っていて、同じ言葉で話し、和気藹々と楽しく学んでいます。その恵まれた台湾の新しい世代を見ていると、私も一人の関係者として、とてもうれしく思います。

平和がいちばん！私たちの仕事は、世界平和が目的。平和でなかったら、私たちの仕事は無くなってしまうのですから。

国際交流をされている皆さん。交流の相手の方のお国のこと、文化や歴史、その国と日本の関係、そしてその国の日本への見方、ご存じですか。実際に行ったことがなくても、今はインターネットの時代、図書館でも調べられます。偏った見方でないか気をつけながら、どうぞ触れてみてください。

紙上講座

■駒場で47年――留学生の小さな支えに

ICN駒場日本語教室（目黒区）

田村みどり

松尾芭蕉ゆかりの深川を訪ねる留学生とボランティア

ICN駒場日本語教室（伊藤あい子代表）は、目黒区駒場のインターナショナルロッジに住む東大と東工大の留学生を対象に開いています。日本語未習から上級まで、学習者数人にボランティア1人のグループ学習です。

ボランティアの年代はさまざまで会社員や定年退職者に大学院生も。週1回の教室のレッスンは学習者の希望に沿い、日本語の学習本、新聞の切り抜きなどを教材に学習を進めています。

学習者はみな日本語への学習意欲にあふれています。共通するのは、自分の意見をはっきり表明することです。

今年6月、沖縄県糸満市の平和祈念公園で行われた「慰霊の日」沖縄全戦没者追悼式で、中3の相良倫子さんが力強く自作の平和の詩「生きる」を朗読しました。「平和とは当たり前に生きること。自分の命を大切にすること」

教室で台湾、ブラジル、エジプトの留学生にこのビデオメッセージを聞かせたところ、「沖縄の人たちの思いを代弁している」「問題を抱える自国で聞かせたい」「日本の首相の反応は？」とメッセージを率直に受け取った意見や質問であふれました。

当教室は1971年、国費留学生対象の駒場留学生会館で、近くの小学校の先生が中心になって始まりました。当時はベトナム戦争があり、世界中の若者たちは自由と平和を求めて闘っていました。

インターネットなどの技術が発展し、国家、地域の垣根を越えるグローバル化が浸透する現代。留学生たちは日本のアニメやゲームが大好きですが、今なお「争いのない世界」への実現に向かって日本で学び研究しています。

こうした留学生たちの小さな支えになりたい。相良さんのように「人間としての目線」を忘れずに――私たちはそう考えています。

■地域で暮らす外国人の居場所となるように

日野国際友好クラブ（日野市）

blog http://blog.goo.ne.jp.hinokokusai/

代表／新藤雄也　執筆／猿川和子

日野国際友好クラブは、民間レベルの国際親善を図るために1992年10月に設立されました。初めはほんの数名の方で始めたのですが、今では会員数約60名となりました。地域に住む外国人が暮らしやすくなるように、何かお手伝いしたいという熱い思いを持ったボランティアたちの活動が、26年間途切れることなく続いています。

活動の中心は日本語教室の開催で、1994年から日野市の委託事業となりました。中央公民館で水曜日の午前と金曜日の夜、七生福祉センターで水曜日の夜に開講しています。学習者は3教室合わせて70名程度。出身国は中国、ベトナム、タイ等アジア圏が中心ですが、他に南米やヨーロッパ等約20カ国を数えます。働いている人（技能実習生、技術者等）、主婦（子供連れの人も）、学生等いろんな人が学んでいますから、それぞれのニーズに応え、レベルに合わせて指導するのは大変です。それでも寄り添いながら、できるだけやさしい日本語で教えたいと、どの先生も頑張っています。複数のグループもありますが、基本的にはマンツーマンです。一時間半の授業の後は楽しいお茶の時間。みんなでワイワイ話しながら交流を深めています。日頃、日本人との付き合いが少ない学習者にとっては、自然な日本語会話ができるとても良い機会となっています。

バーベキュー記念

私たちは支援者の立場ですが、教室では新鮮な発見、小さな驚きや感動があり、学習者から不思議なエネルギーを貰い、元気になって帰ります。

活動はその他、市民対象の国際理解講座（公民館と協働）と国際料理教室、交流イベント（バーベQ、年末パーティー、課外活動）、日本語ボランティア教師養成講座、日本語教育研修会等を開催し、年4回、ニュースレターを発行しています。

日本語ボランティアの現場から

学習者の声

日本語の勉強がおもしろい

サプコタ・ムナ／ネパール
中野区国際交流協会（中野区）

2015年にお父さんの仕事の関係で、ネパールから日本に来ました。今は中学3年生です。ネパールにいたときは日本のことは何も知りませんでした。日本に来て驚いたことは、日本語が難しいことです。日本に来たばかりのときは、どうやって勉強したらいいかわからないなと思いました。ボランティアの先生に教えてもらって、少しずつわかるようになりました。今は日本語の勉強がおもしろいです。日本語がわかって、勉強がわかると、楽しいです。日本語がわかると、どこか旅行に行った時、いろんな人と話せます。知らないことがわかるのは楽しいです。ネパールではネパール語の授業以外は全部英語で授業をしていました。他の授業より簡単なので、学校では英語の授業が好きです。

ボランティアの声

子どもたちはほっとけない

坂本純子
中野区国際交流協会（中野区）

26年前から日本語ボランティアを始めました。当時入っていた英語サークルの先生に「これからは日本語を教える時代です。」と言われ、初めて日本語で日本語を教えるやり方があることを知りました。その後、区報にボランティア養成講座の募集のお知らせが載っていて、応募しました。長く続いたのは、教えることが性に合っていたのかもしれません。

中野区国際交流協会の日本語講座では七夕やひな祭りのような行事もあります。単に日本語だけでなく、文化も教え、ボランティアとして中野区国際交流協会の一員として働いています。

日本語を教える時には仕事に使える、丁寧な言葉を教えることを意識しています。日本人男性と結婚し、来日10年以上経っている女性に「おまえ、めし、食うか？」と言われたことがあります。家庭内では敬語は使わないので、彼女はそれが正しい日本語だと思っていたのです。

中野区国際交流協会では大人だけでなく、小中学生も教えています。子どもを教えるのは、ひとえに『ほっとけない』からです。大人は自分の意思で日本に来ていますが、子どもは自分の意志で来ているわけではありません。日本語の勉強に対するやる気もないかもしれません。それでも、今後定住するなら、日本語ができないと、どうしようもなくなってしまいます。少しでも話せるようになって、高校に入って、社会人として自立して生活できるようにならないといけません。小学校1、2年生は「教える」以前に「机の前に座らせる」ことが重要です。国によっては、日本では当たり前のように行く幼稚園・保育園に行ったことがない子もいます。日本語を勉強する以前に、学校での集団生活や勉強経験そのものがない子も多いのです。折り紙を教えたり、絵を描かせることで気をひき、少しでも座る時間を長く、集中力を長く持たせるように工夫しています。中学生は高校受験に向けて勉強させることが大切です。年齢によって対応方法が変わります。今はあまり机の前に座っていられない子も、高学年になってくると、落ち着いたり、やる気が出たり、急に変わってきます。中野区国際交流協会独自の教科書を全て終わった子が、全て終わった時に「窓が開いた」と表現したことがありました。それまで曖昧でモヤモヤとわからなかった日本語がわかるようになった。難しい歴史の教科書が何を言っているのか、わかるようになったということでした。最後まで教える意義をこの時強く感じました。

◉2018年度第1回運営委員会が開催されました。

7月20日午後6時から8時まで「東京ボランティア・市民活動センター」にて活発な意見交換がされました。主な意見を簡単にまとめました。出席11名。

●「日本語教室におけるレベル」などについて各教室の実情や考え方。

○運営委員会に参加した殆どの教室では「誰でも、いつでも、どんなレベルでも」受け入れています。また、入門・初級者には手厚く対応する方針とのことです。ボランティアが足りなくなった時には学習者のレベルを考慮し、良くできる学習者には卒業証書を出して他の分野での活躍を勧めた例や、日本語ボランティアになってもらった例もあります。教室が学習者の憩いの場となっているので、長い学習者にやめてもらうことはないという例も出されました。

○学習者と支援者の組み合わせ。

足立区の教室では「学習者が支援者を選ぶことが出来る」そうです。見学してみたいですね。好ましくない例として「支援者が学習者を選り好みする」が複数ありました。

学習者と支援者の組み合わせを定期的に変更する教室と、変更は殆どしない教室があります。どちらかでなければということはなく教室の個性です。

●技能実習生の受け入れについて。

○技能実習生を受け入れている教室から色々な実例が報告されました。

当初は仕事を早めに終わらせてもらって通ってきたが、日本語が上手になると残業が増えたりしてあまり来なくなる。母国でN4を合格してきたとの自己申告だがその力はない。社長に連れられてきたが、本人は出稼ぎと割り切っておりすぐに辞めたなどです。

一方、中野区の企業から受託して日本語指導をしている教室からは、会社が技術者を育てるという強い意志を持っていると様々な企業努力などが披露されました。

○技能実習生制度に関して

政府の説明では「日本の進んだ技術を習得してもらい、帰国後はその技術を活かしてもらう」が目的だが、実態の多くは出稼ぎ意識。徴収すべきではないお金を徴収する送り出し機関があり多くの借金を抱えて来日する実習生がいる。すべての機関が悪いわけではない。所管が国から地方自治体に移された。対応機関が身近になったことで良い効果が出てくるだろうとのことです。

（文責岡田）

◆運営委員をお願いしました。　宇野　公容　JCA千歳船橋（世田谷区）

Column 「日中交流に貢献している中国人女性=孫秀蓮さん」

孫秀蓮さんについて、町田市での講演の内容を当ネットワークニュース100号のCOLUMNでご紹介しました。孫秀蓮さんは、日中文化交流誌「和華」の編集長、中国からの観光客向け日本文化体験の企画、中国人起業家向けの経営経済交流支援などを仕事とされています。

今回は、彼女が特に力を入れている「和華」の記事から興味深いものをご紹介します。

●創刊号から。①「中華人民共和国」という国名の「人民」と「共和国」は、日本語から中国語に取り入れられた和製漢語である。②日本語の「カラオケ」は発音をそのまま使い、中国語で「卡拉OK」という。「『卡拉OKいこうぜ』『OK』」という会話も聞こえてきそう。③日本語の「手紙」は中国語では「トイレットペーパー」の意味。「手紙」の中国語は「信」④「日本人と中国人の特質」も面白い。例えば「日本人―繊細、中国人―おおらか（いい加減）」等々。

●第10号（「茶」特集号）孫さんが執筆した「私が恋した日本」から。…茶室には三つのつながりがある。一つは「自然とのつながり」で、静かに自然と調和している。二つ目は「人と人のつながり」。小さな扉から入り，全ての人が平等である。そして三つ目は「自分とのつながり」。一つの作法を順番に行うには、心が落ち着いていなくてはならない。慌ただしい日常の自分から離れ、心を磨くことにつながる。

「和華」は、中国文化ばかりでなく日本文化についても学ぶことが多い雑誌です。

（床呂英一）

東京日本語ボランティア・ネットワーク事務局

TNVN東京日本語ボランティア・ネットワークはボランティア日本語学習支援活動を行っている団体のネットワークです。TNVNの会員はそれぞれ地域での日本語学習支援活動を通して、言葉のため日常生活に不自由を感じている外国人などを、隣人として支援しています。TNVNは会員への情報提供・会員相互の情報交換、および外部との情報受発信を行い、活動の活性化を図ります。

東京日本語ボランティア・ネットワーク事務局の活動

◆日時：毎週金曜日午後2時～4時
第5金曜日／休み

◆場所
東京ボランティア・市民活動センター
JR、地下鉄（東西線・有楽町線・南北線・大江戸線ー出口B2b）飯田橋駅下車
セントラルプラザビル　10F ロビー

◆日本語ボランティア相談窓口
日本語ボランティアの活動についてのご相談・ご質問にベテランスタッフがお応えしています。メール・電話でご確認の上、気軽にお越し下さい。また、メールでのお問い合わせにもお応えしています。ご意見もお待ちしています。

〒162-0823
東京都新宿区神楽河岸1-1
東京ボランティア・市民活動センター
メールボックス　No.4
◆TEL：03-3235-1171
（呼出：金曜日活動時間帯のみ）
◆FAX：03-3235-0050
◆E-mail：webadmin@tnvn.jp
◆URL：http://www.tnvn.jp/

◆郵便局払込
口座番号：00100-1-719259
加入者名:東京日本語ボランティア・ネットワーク

◆会員数（2018年9月14日現在）
正会員：88団体
個人協力会員：14名
賛助会員：3団体

◆編集／大木 千冬、岡田 美奈子、小川 伶子、梶村 勝利、神 歩、床呂 英一、林川 玲子、山内 眞理
◆レイアウト／美巧社